

1. 第2回 仙台市音楽ホール検討懇話会 議事要点

1. 前回の議論の論点整理についての補足

(1) 兵庫県立芸術文化センターの生み出している価値について

- 県民調査の結果、センターを利用しない人にもいろいろな価値を与えていることが確認された。
- センターに対してどのぐらいの寄付をしてもよいかという質問に対して、センターを利用している人はもとより、利用していない人も、多くが支援の意向を示した。
- 仮想評価であるが、その総額は管理運営に投入している県費を超える金額となった。
- その理由は大きくは2つであり、1つは、自分はセンターを利用しなくても、将来世代、あるいは自分以外のものに利用をさせたいという価値、もう1つは、センターがあることでまちの魅力が高められているという価値である。

(2) 施設の利用層以外に出来るだけ幅広い市民を呼び込むための工夫について

- 大規模改修を行った京都会館（現在はロームシアター京都）は、条例に「憩いの場を提供するための事業」を規定し、それに基づき、カフェとブックショップ、レストラン、コンビニエンスストアなどが設けられ、この利用者は劇場に来る人以上に多い。

2. 設置目的、ねらいの考え方について

① 実演芸術のための、生の音響に優れた2,000席規模の大ホールの整備が何よりも望まれる

- 音楽、演劇など実演芸術は、その場で消えてしまうものであるが、感動の「記憶」が残し、一生その人間を育て続ける。多くの人々が一堂に会して感動を共有し、それが積み重なることで、新しい文化が生まれる。仙台にそのような場がようやくできると期待している。
- 2,000席規模の大型ホールでなければできない公演などもあり、仙台はそれがやれてこなかった。数十年を無駄にしてきたともいえる。それを実現したい。

3. 機能構成について

(1) 6つの機能について

① 6つの機能を全てが必要か、他の施設と分担、強弱をつけることはできないのか

- 財源や整備のスピードの問題として、単独の一つのホールに全てを盛り込むことは難しいのではないか。6つの機能全てがこの施設に必要なのかという疑問がある。すでにあるホールを活用するなどできないのか。
- 2,000席規模の音響の優れたホールの整備が今回のメインとなる課題であって、その他の機能も念頭に置くべきであろうが、強弱を明確にすべきではないか。

② 仙台がこれから作るホールとしては、必要な機能のセットではないか

- 全ての機能が同じ重さではないであろう。施設のにも運営的にも、ホールに係る部分が最も大きく、財源も多く必要となる。他の機能は、どれかを落とせば経済的に安上がりになるというものではないと思う。

(右上につづく)

- この施設が仙台市の文化芸術振興の拠点であるなど、整備の目的からすれば必要な機能のセットではないか。
- 他のホールと役割分担や連携をして取り組むべきという指摘はそのとおりである。

(2) 「公演・鑑賞・発表機能」と「文化力発揮機能」の違いについて

① 「公演・鑑賞・発表機能」は優れた文化芸術をホールで体験する機能

- 公演・鑑賞・発表機能は、ホールを中心に行われる活動であり、優れた文化芸術に触れる機会を創出する。音楽であれば演奏家はその持てる最高の技術を披露し、それを聴衆が聴くという形になる。

② 「文化力発揮機能」は文化芸術の力によって様々な課題の解決につなげていく機能

- 文化力発揮機能は、公演と異なり、聴衆という聴く目的を持った人だけではなく、目的を持たない全ての人を対象になる。芸術家は、自らの表現を伝えるのではなく、人々の持つ創造性や生きる力を引出し、気づかせることなどが役割となる。
- 必ずしもホールで行う活動ではなく、施設内の諸室の他、地域の様々な施設などで行われる。

(3) 「文化力発揮機能」の意義について

① 震災復興過程で文化芸術が果たしてきた役割を継承、発展させていく機能

- 震災復興過程で文化芸術の持つ力が大きな役割を果たしたが、それはこれからの少子高齢化、人口減少社会においても有用な活動であると考えられている。そこに向けて発展させていくことが大事ではないか。

② 人材育成やプログラム開発が必要

- 教育、医療、福祉などの分野で子どもや障害者、高齢者などに向けたプログラムを開発し、実施する。それは施設の中であつたり、病院や福祉施設など地域の施設で行われたりする。日本でも行われるようになってきたが、欧米ではこの分野の専門家が多数おり、施設にもいる。そのような人材育成やプログラム開発が必要である。

(4) 機能による概念設定について

① 機能によって、施設はなにをするためのものなのかを明確にすることは重要

- 施設づくりは、建物や空間といった目に見えるハード中心に考えてしまうが、それらが何をするためのものなのかを最初に明確にして、それに沿って施設を造っていかないと、期待される成果は十分発揮できない。機能を設定することは大事である。

② 最先端の施設のあり方を目指す概念整理になっているのではないか

- 日本のホールは、集会施設の公会堂から始まり、多目的ホールが広く普及し、専用ホールの整備、さらに稽古場や練習施設などの複合化などが進んだ。また、阪神・淡路大震災での文化芸術の力の認識の高まり、そして最近の「新しい広場」や社会包摂の役割、文化芸術の経済的・社会的価値の推進など、新たな考え方概念の導入されてきた。そのような今日までの劇場・音楽堂の発展を踏まえ、最先端の機能設定になっているのではないか。

③最も重要なのは人材育成機能である

- 劇場・音楽堂に求められる機能の広がりが高まりに応じて、従来は舞台技術や施設運営者といったホールマネジメントの人材育成が課題だったが、新しい役割に応じたより多様な人材の育成が必要になってきており、これらの人材を育成していく機能を織り込んでいくという提案であろうと理解している。

4. 施設像の考え方について

(1) 大ホールの音響について ⇒ 参考資料

①生の音響に優れた大ホールであることは絶対に外せない優先事項である

- 多様な機能を持つことが、従来の多目的ホールと同様のことになってしまうのではないかと危惧をする。今回のホール整備の肝、一番大事なのは、クラシックなど生の音に一番有利な音響、響きをもったホールであることである。
- 生の音響が本格的なものであることが絶対的な条件である。そうでないなら問題外である。

②生の音響に本格的に対応する形状と、多様な舞台芸術にも対応する形状を持つ

- ここで想定する高機能な多機能ホールとは、クラシック音楽など生の音響に優れたコンサートホール型のホール形状、多様な舞台芸術など身体表現や演出に適し、電気音響をも使うプロセニウムを持った劇場型のホール形状、2つの異なる性能・形状をもったホールである。

③コンサートホール型の場合の生の音に対する音響性能は信頼性の高いものにできる

- 30年ぐらい前とは、設計、施工、建築部材、設備、様々な面で技術力が高まっているし、また、今回はこのような当初の段階から目的を明確にして議論をしてきている。生の音響の水準の確保を前提に計画されていくことになる。
- 兵庫県立芸術文化センターも一つ例だがこれも15年以上前の設計である。日本は非常に沢山の経験を持っているので、信頼感あるものができると思う。

(2) 生の音響を重視した高機能な多機能ホールであることについて

①仙台にとって重要で、かつ、いい選択なのではないか

- 前回の資料で、2,000席規模としてはポップスの中心施設である仙台サンプラザがあるが、生の音響に優れた大ホールが空白地帯であり、その他多目的なホールなどとの役割分担を想定して、計画されていると理解している。大型ホールに対する需要は高く、クラシックなど生の音の利用だけに限るのではなく、現在の最高水準の技術を使って、多様な使い方も排除しないホールとするとされている。これは仙台にとって重要な選択であり、いい選択ではないか。

②持続可能性という観点からも専用ホールではなく多機能であることが望まれる

- 専用ホールとなると、専用化した分野の需要に限られ、土日の中心の利用となり、平日の利用があまり期待できないのではないか。多機能ホールとすることにより、舞台芸術の利用だけではなく、MICEと言われるような会議・大会なども開催ができると、平日の需要も見込めることから、運営面でも良いと考えられる。

③ホールはできるだけ使っていただくことが何よりも大事である

- 性能が高くなければ使っていただけないので、それは必要条件であろうが、それだけで十分ではない。できるだけ使ってもらって、特定の人だけではなく、多くの、幅広い層の市民が訪れ、文化芸術に触れてもらうことが何よりも大事である。

(3) リハーサル室、練習室等、創作・練習部門について

①大人数で練習できる場が必要、ワークショップなどの活動の場としても重要

- 練習室を大きめのものを中心に考えられているのは良い。大きなグループは場所が限られるし、抽選の競争も高く、取れない状況にある。
- 練習も含め、ワークショップなどができるような施設でないと、現代の施設としてはどうかと問われる。

②100人規模で利用できるリハーサル室、音響の違いに対応したものが望まれる

- リハーサル室は100人位の人数でもリハーサルできるような部屋が必要である。できれば、打楽器系の練習室、管楽器系の練習室が別々にあると望ましい。

以上